

女性研究者技術者委員会ニュース

No. 23 2011年2月10日

連絡先：日本科学者会議全国事務局 Tel：03-3812-1472、Fax：03-3813-2363

e-mail：zenkoku@jst.gr.jp ホームページ <http://www.jst-t.jp/woman/index.html>

目次

1. 特集 第18 総合学術研究集会
 - 1-1 分科会 「男女共同参画はどこまで進んだのか」 プログラム
 - 1-2 分科会総括 「男女共同参画はどこまで進んだのか」分科会を終えて
金子幸代(富山大学 女性研究者・技術者委員会委員長)
 - 1-3 基調講演者の一言
「男女共同参画はどこまで進んだのか」を報告して 朴木 佳緒留(神戸大学)
 - 1-4 発表者、聴講者の感想
 - ①「F1 女性分科会 男女共同参画はどこまで進んだか」感想 三宅 良美(秋田大学)
 - ②「男女共同参画はどこまで進んだのか」に参加して考えた二つのこと
沢山 美果子(岡山支部)
 - ③「男女共同参画」という理念と実際から感じたこと (匿名希望)
 - ④寄せられたアンケートより
 - 1-5 18 総学 実行委員感想 「実行委員の役目を終えて」 高木 直(山形大学)
2. 第8回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム参加報告 石渡真理子(全国常任幹事)
3. 各地の話題
東京支部「はづきの会」の取組み 池上幸江(東京支部 代表幹事)
4. 2010年女性研究者技術者委員会記録
5. 事務局メモ 女性研究者技術者委員会関連 活動の記録(2010年)

1. 特集 第18 総合学術研究集会
 - 1-1 分科会「男女共同参画はどこまで進んだのか」プログラム
コーディネーター：金子幸代(富山大学 女性研究者技術者委員会委員長)
開会挨拶：金子幸代
講演・発表司会：沢山美果子(岡山支部)
基調講演 「男女共同参画はどこまで進んだか」 朴木佳緒留(神戸大学)
発表1 「女性研究者としての歩みと今後への問題提起」 池上幸江(東京支部 代表幹事)
発表2 「地域での男女共同参画の取り組み状況」 高木 直(山形大学)
発表3 「ジェンダー学の実施状況に関して」 中山庸子(福島大学)
発表4 「外国語教育と女性」 三宅良美(秋田大学)
質疑応答・全体討論・まとめ
閉会挨拶：石渡真理子(全国常任幹事)

第18回総合学術研究集会 要旨集 後日、CDにて販売予定。ご期待下さい。

1-2 分科会総括 「男女共同参画はどこまで進んだのか」分科会を終えて

男女共同参画社会基本法が施行され10年たち、男女共同参画に関する法律や制度は一応整備されてきましたが、欧米先進諸外国と比べて意思決定レベルの女性比率の低さや科学技術分野における女性研究者の極端な少なさは一向に改善されていません。そこで11月20日、18総学・仙台大会では「男女共同参画はどこまで進んだのか」をテーマとし、男女ともに働きやすい職場作りについて話し合う分科会を持ちました。神戸大学の朴木さんの基調講演をもとに池上さんが御自身の女性研究者としての歩みについて報告され、高木さんが山形大学での取り組みについて、秋田大の三宅さん、福島大の中山さんが大学教育の実践例について発表されました。これら大学での男女共同参画の取り組み状況や教育の現状を踏まえ、総合討論を行いました。

参加者は20名と前回の名古屋大会より少なかったのは残念でしたが、男女共同参画室長としてまた現在神戸大学初の女性学部長として実際に男女共同参画に取り組んだなかから見えてきた課題について発表された朴木さんの基調講演が貴重かつ具体的で参加者の胸を打つ有意義な会となりました。18総学懇親会後に、男性を含めて計16名で女性研究者・技術者委員会の交流会も開催され、山形や秋田など東北の珍しい御菓子をつまみながらなごやかに交流しました。交流会を御世話くださった高木さん、三宅さんをはじめ東北地区の皆様には感謝申し上げます。

(金子幸代、富山大学、女性研究者・技術者委員会委員長)

1-3 基調講演者の一言 「男女共同参画はどこまで進んだのか」を報告して

標記テーマを18総学にて報告したのは11月20日であった。この原稿を書いているのは12月末である。およそ1カ月が経ったが、この間に、政府の「事業仕分け」や「政策コンテスト」があり、科学技術にかける予算について、注目する日々が続いた。結局、科学技術振興調整費はかたちを変えるようである。詳細はいまだ不明であるが、具体的には競争的資金ではなくなる、間接経費がなくなる等々の話が聞こえてくる。

科学技術振興調整費による「女性研究者支援モデル育成」及び「女性研究者養成システム改革加速」事業はいずれも競争的資金によるもので、申請し採択される必要がある。一般に、競争的資金は比較的、採択されやすい大学・機関とそうではない機関がある。上記した二つの事業はいずれの大学・機関においても必要とされることがらであるが、必要に応じて予算が配分されるわけではなく、「競争」に勝った大学・機関だけに配分されている。そのことを指して、報告では「アンビバレントな気分」を述べた。この「気分」に共感してくださる方が多く、有難いことであった。このたび、競争的資金ではなくなるということであるが、ほとんどすべての大学・機関に予算配分されるとは聞いていない。したがって、「アンビバレントな気分」は今後も、続きそうである。

男女共同参画はあらゆるところで行われる必要があるため、本来的には競争的資金になじまない。しかし、正直なところ、間接経費がなくなるのは相当な痛手である。人口縮小、経済縮小することが予想される今後、男女共同参画こそが国の未来を切り開く道であることを多くの方にご理解いただきたい。この趣旨は、分科会では十分に共有できたと思われるが、はたして日本科学者会議全体ではいかがであろうか。分科会の参加者は少なく、率直に言えば少々さみしく、分科会への参加者増が課題であると思われた。

(朴木佳緒留 神戸大学)

1-4 発表者、聴講者の感想

①「F1 女性分科会 男女共同参画はどこまで進んだか」感想

それぞれの発表時間が少しずつあとにずれるほどに白熱した、興味深いものだった。

基調講演は、日本の女性研究支援モデル育成事業の歴史と、神戸大学の取り組みの詳しい報告であった。文部科学省は、平成18年に女性研究者支援モデル育成事業を、その後平成22年度には『女性研究者養成システム改革加速』事業を開始した。神戸大学はいずれもそれぞれ2年目に採択されており、女性研究者の数を着実に増やしている。

しかし、朴木氏は2つの問題を提起している。①女性研究者支援事業は、国際的にみて、女性研究者が極めて少ない日本のジェンダー平等レベルを上げようという政府の『世界の手前なんとかしなくては』という国際的な顔を維持したい姿勢が現れたものだということ、また、②ふたつの事業が開始されて後、採択された大学での女性研究者は明かに増えているが、職階が上がるにつれて女性比率は減少し、教授にいたっては、女性は7.2%にとどまる。具体的な部分を見ると、まだ課題は残っている、ということである。

神戸大学の教育現場で、自分の研究を投げ捨ててこの共同参画推進事業に最初から取り組んできた朴木氏の講演は、具体的かつ明快だった。驚いたことは、神戸大学はポジティブアクションを文字通り実践しているのである。各年に女性研究者・教員を2人、3人と雇用することを決議、公募にはそのことを明記している。思い切った決断。ここまで来るのに相当な道りがあったにちがいない。

他の講演、たとえば高木直氏の講演に基調講演に重複する部分があった、という感想もあったが、テーマが「男女共同参画はどこまで進んだか」だから重複するのは考えられた。それどころか、かたや男女共同参画をおおいに発展させている神戸大学、かたやそれに順じてなんとか男女共同参画という意識を植え付けようという段階の両方の事例が聞けて、実り多かった。秋田大学は山形大学と同じ年に女性研究者支援モデル育成事業の採択を受けた大学だから、むしろ山形大学からの報告は具体的で現実的だった。3人任期付常任を配置し、学生保育をはじめなど、実際に大学の教職員のジェンダー問題に具体的に関わっているからである。

秋田大学も男女共同参画センターを設け、女性研究者支援モデル事業に採択された。コロコニという愛らしい名称とロゴがついたホームページのもと、共同参画推進のためのプログラム、施設、講演の紹介などがあり、秋田大学の意欲がうかがえる。もっとも画期的なことは病時保育設備という保育機関の開設である。ただ、これがどのくらい利用されているのか、などはまだわからない。私たちはこれから風通しのよいところで意見を語り合ったり提案したりしたい。

(三宅良美 秋田大学)

②「男女共同参画はどこまで進んだのか」に参加して考えた二つのこと

今回、この分科会に参加して考えさせられたことは二つある。一つは、神戸大学の取り組みについての朴木さん、ご自身の女性研究者としての歩みについての池上さんのご報告をお聞きして、特に考えさせられたことである。後に続く世代の女性研究者が少しでも生きやすく、研究しやすくなるには、どうしたらよいか。お二人の報告は、そうした広い視野での取り組みが確実に男女共同参画を進めてきたことを実感させてくれるものであった。また様々な矛盾をかかえつつも、女性研究者としての軸足をどこに置くかということを深く考えさせられる貴重な、

そして感銘深い報告であった。二つには、専門分野、世代、職場、地域を異にする女性研究者が分科会を持ち交流する意味はどこにあるのか、再度、原点にたつて考える必要があるのではないかということである。それは、分科会や交流会で出された質問、意見とも関わる。分科会では、大学間格差が大きいなかで私学の男女共同参画はどこまで進んでいるのかという質問が出され、交流会では、就職自体が困難となり、就職したとしても任期制の職が多いなかで、どのようなタイミングで、結婚し、出産したらよいか、若手の女性研究者にとっては切実な問題となっていることが話された。

今回の分科会では、池上さん以外はすべて国立大学の、朴木さんが強調された「たてまえ」が、少なくとも通用する職場からの報告であった。しかし、女性研究者の多くが所属する弱小私学や、若手女性研究者、非常勤講師の問題を視野に入れて考えなければ女性研究者問題の全体は見えてこない。また、女性研究者全体の地位の底上げも難しい。そうした課題も考えさせられた分科会であった。

(沢山美果子 岡山支部)

③「男女共同参画」という理念と実際から感じたこと

私は大学に職を得て4年目、社会科学系学部の今の職場は着任してまだ半年です。これまでの日本科学者会議の運動の主体や歴史に影響されているのだと思いますが、「女性研究者・技術者」といった場合には、「理系」の女性研究者・技術者が念頭に置かれ、その現状について問題意識が向けられているように感じてきました。「男女共同参画」という言葉も、どちらかというとう優れた理系の女性研究者を念頭においた政策理念のように感じてきました。この言葉自体はもちろん知ってはいましたが、これまで学内であまり聞くこともなく、また私自身も何らかの障害や問題意識を強く感じたことはありませんでした。ある意味で、「男女格差」を当たり前の現状としてきたのかもしれない。

しかし、正規職について半年、人生の次の岐路(結婚や出産、子育てなど)を考えるようになって、「はたしてやっていけるのだろうか。」という不安を抱くようになってきました。そのようななかでの分科会「男女共同参画はどこまで進んだのか」で、現状を知り、そして現状を変えられるものと捉え、実際に変革が芽生えているご経験をお聞きでき、改めての問題意識と運動の道筋を得ての励ましとなりました。理系・文系を問わず、あるいは女性・男性を問わず、多忙化する教育・研究状況の中で闘うヒントがちりばめられていたように思います。

若手女性研究者としての悩みは尽きませんが、諸先輩方の歩みの一步一步が経験則として参考になることは間違いないと思います。矛盾に満ちた現実と照らし合わせて、それを乗り越える元気と手立てをこれからも見いだせる場になればよいと思いました。

(匿名希望)

④アンケートより

④-1 朴木さんのお話は、ご自身が抱かれているアンビバレントな意識についても触れられて、大変興味深く聞かせていただきました。私自身が男女共同参画推進としてのポジティブアクションに疑問を持っている部分があるので、共感できる場所が多かったです。細かい話になりますが、GEMの改善の近道は大学の理事や副学長などに女性を登用することではないかと思ひます、それこそお金もかかりませんし。しかし、「加速」事業については、少し「無理」(というか「力技」で押し切っているような感)がします。私の大学の「加速」事業だけかもしれませんが。

特に、私のところのやり方の「デザイン」がまずい気がします。

池上さんのお話をうかがって、だいぶサボリ気味な自分を反省しました。女性自身の意識改革もまだまだ追及しなければならないようです(自分を含めて)。多忙化を極める大学において、教授になればさらに忙しくなるばかりで、准教授のままのほうが気楽でいいと思ってしまいましたが、日本社会における男女共同参画推進のためには、がんばらなくてはならないなあという気持ちにさせられました。

高木さんは、「理事つきのスタッフとしていろいろ仕事をしている」とおっしゃっていましたが、高木さんを男女共同参画推進担当理事に任命すればいいのに。「ジェンダー」というよりは「人間存在」そのものにアプローチするというジェンダー学の授業の実例は大変参考になりました。今後の授業にいかしたいと思います。

三宅さんのお話には、私にとって新しい視点が含まれており、興味深いものでした。また、社会の文化によって人間が形成されるということを改めて確認できました。「国際化＝外国語教育」という短絡的な方針のはらむ問題性や新たなワーキングプア産出の問題等、いろいろと考えさせられました。

私学の話もでしたが、国立も様々ですし、私学も様々、分野によっても状況が大きく違うので、よそでうまくいったやり方をどこかから探してきて実行するというのでは、むずかしいと思いました。やはり、自分たちの環境をそれぞれの場で自分たちの力で変えていこうとする努力が重要だと思いました。(40代 女性)

④-2 三宅さんの報告は、女性がいかにか「英語力は自分の責任」と捉えることを強要されているかが、秋田大のアンケートより分かった。

まず、より調査を活かすために補足すべき点と感じたことは、

- ・ 英語の平均点を男女別に比較できていない。
- ・ 「理系＝優秀」という自己評価はどの質問が根拠かが不明。

報告を聞いて生まれた問題意識；

- ・ なぜ(&どのように)、社会が上記のイデオロギーを植え付けるのか。
 - ・ 女性が通訳を選んだから賃金が下がったのか、賃金が下がったから女性がえらぶのか(男性が選ばないのか?)。
- (20代 女性)

④-3 朴木さんの「たてまえを逆手にとる」など、よく学べました。非常に有意義でした。ありがとうございます。次は男女共同参画でどうなったか、もっと知りたいです。(50代 女性)

④-4 いずれの講演も特色があつて勉強になりました。大学だけでなく研究機関や企業の研究者について、男女共同参画をどうするのかを考えていきたい、また、幼児期からの教育の中で、女性としてのバイヤスをかけないようにするには、どうすればよいか考える必要があると思いました。(60代～ 女性)

1-5 18 総学 実行委員感想 「実行委員の役目を終えて」

この度の18 総学は東北地区6 支部の力を結集して仙台で開催することになり、各支部から2 名ずつの実行委員が出ました。実行委員のうち女性は秋田支部の三宅良美さんと山形支部の私の2 名であり、女性研究者技術者委員会と協力して分科会を担当することになりました。実行委員会は2009 年9 月から動き始めましたが、分科会の方は、2010 年3 月の女性研究者技術者委員会分科会でテーマと趣旨を決定した後、メールでのやりとりで準備が進み、何とか当日を迎えることができました。

当日は参加者があまり多くはなかったものの充実した分科会になったと思います。女性研究者技術者委員会の皆さまをはじめ、講演者の皆さま、ご参加いただきました皆さまに心から感謝申し上げます。

個人的には、実行委員としての役割を十分に果たせたとはいえず反省することが多々ありますが、分科会や交流会で多くの方々と意見交換でき、準備を進める中で親しくお話できる人が増えたことはとても嬉しいことです。また、当日、初めての職場で一緒だった方と十数年ぶりにお会いできたことや、ここ数年注目して講演会の追っかけをしている研究者ともお会いすることができ、とても充実した集会となりました。

余談ですが、年末に本学に集中講義で来ていただいた他大学の女性の先生に、18 総学のよもやま話をしたら是非入りたいと言って下さいました。思わぬ副産物があるものですね。2 年後の19 総学で、また皆さまと再会できることを楽しみにしております。

(高木直 山形大学 18 総学実行委員)

2. 第8回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム参加報告

2010 年10 月7 日、理化学研究所 和光研究所(埼玉県和光市)で開かれた表記のシンポジウムの分科会に参加しました。

分科会は3 テーマあり、私が参加したのは「学会を含むリーダーシップ活動における機会均等」で、「学会でオーガナイザーやスピーカーとして活動している女性は非常に少ない。女性のリーダーシップをどう育てるか。」についての報告・議論でした。

4 つの報告の1 つ、コロラド大学名誉教授 末岡多美子さんの「学会活動におけるリーダーシップ」では、①アメリカでも科学の分野でリーダーとして活躍する女性はまだ少ないこと、②女性のリーダーを育てるために米国細胞生物学会などいくつかの学会進めている具体的な取り組み内容、等が報告されました。もう1 つの報告、国立女性教育会館理事の久保真季さん「リーダーシップに関する国内外の実践例と今後の展望」でも、アメリカでの女性研究者のリーダーシップ向上のための取り組みの事例が紹介されました。

アメリカの学会での女性のリーダーを育てるための取り組みは様々でしたが、“round table discussion”の話は特に参考になりました。小人数で、テーブルごとにテーマ(キャリアの案内など)を決め、アドバイザーを配置する。参加者は、飲み物などを持参して自由に好きなテーマのテーブルに行く。途中で退席しても、別のテーブルに移動しても良い。開催頻度については聞き逃がしましたが、年会のイベントとして開いたり、朝食やランチのときなどに開くのではないかと思います。

シンポジウムの詳細については後日、報告集が出る予定。連絡会のホームページは次の通り
<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/index.html> (石渡真理子 全国常任幹事)

3. 各地の話題 東京支部「はづきの会」の取組み

東京支部の女性有志の集まり「はづきの会」では、最近活動はやや停滞気味で、年に1、2回集まっていましたが、今年度の全国からの提起にしたがって、女性会員を中心とした会員拡大を念頭においた活動に取組みはじめました。

まず、「はづきの会」の開催回数を増やし、会員拡大を中心に据えながら、個人会員で住所が把握出来ている方々への拡大への協力、「はづきの会」への参加や希望活動などへのアンケートを行いました。また、女性院生には、今後共同活動の可能性についてアンケートを実施しました。「はづきの会」のメンバーが親しい会員には手紙も添付しました。そのレスポンスは期待したほどではありませんでしたが、現在数人の方々に声を掛けているところです。しかし、具体的な成果には至っていません。拡大は容易ではないことを痛感しましたが、私たちはそれでめげてはいません。拡大のためには、日常的な活動の活性化が必要であることを改めて確認しました。

そのような中、18 総学(仙台)に合わせて開かれた女性研究者技術者委員会において、(第13回)全国シンポジウムの開催が提案されたことは、女性研究者・技術者の活動活性化のためにもタイムリーだったと思います。これまでのシンポジウムとは違った企画で、京都支部の長谷川さんをはじめとした関西の委員の方たちが中心となって頑張っておられることになり、私たちも勇気づけられています。

「はづきの会」では今、新たな活動の企画を検討中です。まだ具体的な内容には至っていませんが、女性の要求を反映した活動をしたいと考えています。他方、若い女性たちからは、やはり現在活躍中の中堅女性研究者や、院生たちの専門分野に近い研究者との交流が望まれています。こうした地道な活動と併行しながらこそ拡大が可能である、という原則に到達しているところです。

それぞれの支部での活動からの経験をぜひ教えて頂くとともに、全国規模での取組みについても知恵を出し合う必要があるように思います。(池上幸江 東京支部 代表幹事)

4. 第46期 第2回女性研究者技術者委員会記録

○日時：2010年11月21日 9:30~11:30

○場所：仙台KKRロビー

○出席者(順不同、敬称略)：金子、池上、沢山、長谷川、朴木、石渡

○審議・決定事項

1. 女性委員会ニュース発行に向けて分担の割り振りや連絡について確認した。(担当は中村) 締切りは12月末。2011年1月発行予定
2. 18 総学分科会「男女共同参画はどこまで進んだか」および女性交流会について
分科会出席者：20名 女性交流会：出席者16名
3. 第13回女性研究者技術者全国シンポジウムについて
時期：2011年10月16日(日) 場所：京都(立命館大学)
内容：特に若手女性研究者が元気になれるものにする。

小規模でも良いので、現在抱えている問題(進路・就職・昇進・結婚・出産等)をゆっくり議論できる形式が良い(round table discussion など)。

記念講演：京都女性研究者の会 宇野賀津子さん(レイ・パストゥール医学研究センター)、話題提供 今田絵里香さん(京都大学大学院文学研究科)に依頼(担当 沢山)

その他：・京都支部に全面的サポート依頼(担当 金子)

- ・上野鉄男学術体制部長(京都支部)にもサポート依頼(担当 石渡)
- ・次の全国常任幹事会(2011年3月6日)でシンポ開催への協力依頼(担当 石渡)
- ・全国シンポに向けて、委員会を開く。(2011年3月26日土曜日 JSA 事務室)
この委員会には連絡員も出られる方には出てください。(拡大委員会とする)
- ・委員会開催に必要な経費(旅費)は学術体制部と事務局に確認(担当 石渡)

4. 委員会の人事

金子さんが委員長を辞意表明、後任に沢山美果子さん(岡山支部)決定。次の大会で交代。

5. 常任幹事会の担当常幹に藤井さんを追加(報告)。

6. 会員拡大について

全国シンポの取り組みの中で入会を呼びかけていく

7. 次回委員会 2011年3月26日(土) 14:00~17:00 東京、JSA 全国事務室にて

○委員会後の経過(2011. 1. 13 現在)

- ・記念講演の依頼(担当 沢山)：宇野さん了承(10月16日)
- ・上野学術体制部長への依頼(担当 石渡)：上野さん了承、1/8の京都支部幹事会で開催協力を決定。
- ・拡大委員会の旅費(担当 石渡)：事務局会議、学術体制部部会で検討の結果、組織強化活動費として了承された。

5. 事務局メモ 女性研究者・技術者委員会関連活動の記録(2010年)

1. 委員会開催：2010年4月3日、11月21日
2. 第8回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム参加
3. 第18回総合学術研究集会分科会企画・開催
4. メーリングリストによる情報交換・議論、各種呼びかけと応答：
zenkoryu(女性研究者・技術者、男性会員含む、自由参加用) 計136件
jsa-z-woman(委員・連絡員用) 計202件

<予告> 第13回女性研究者技術者全国シンポジウム

日程：2011年10月16日(日)

場所：京都(立命館大学)にて

早めに手帳へ書き込んでおいて下さいね!

zenkoryu(女性・男性会員向け、自由参加用メーリングリスト)にご参加ください。研究、権利・人権、男女共同参画…情報提供も相談や依頼も歓迎。申し込みは日本科学者会議ホームページから、または各支部の委員か連絡員へ。